

「行きたい大学」へ復権を

苦難と挑戦

県立大50年の歩み

④

「国公立大（の志望者が進む）の最後の砦」。「あちこちに手を出して浅く、時代に迎合している」。「何を勉強するのか」が分かりにくい。容赦ない厳しい意見が並ぶ。

10年ほど前、県立大が県内の高校関係者を対象にした聞き取り調査。経済学部は長崎大に比べ歴史と知名度で劣り、学科によっては、何を学ぶところか分かりにくかった。

全入時代の試練



国公立大の最後の砦である。中国語等の外国語にも力を入れた長崎大学の経済学部がある。県外校とあまり変わらない意識のこととの差をあまり感じられず低下する。長崎県立大学（経済学部）に比べて入試の件です。国語・英語と。特に経済学部の入試が厳しいと思う。

「国公立大の最後の砦」。約10年前の県立大の聞き取りに対し、高校関係者からは厳しい意見が相次いだ（山口隆行撮影）

める。

こうした中、入試にセンター試験を導入する私立大が増え、熾烈な競争にさらされている。2000年代後半になると、合格者の入学辞退が年々増加。志願倍率は増減を繰り返しながら下降傾向にあり、ここ数年は3倍

6倍ほどで推移している。「アラカルト入試」に変更。この年を境に、県外

背景には入試科目の変更があった。当初はセンター試験（共通1次試験）の5教科を必須としていた。しかし、流通学科を新設した1991年以降、国語、社会、数学、外国語から3教科を選ぶ

かつては県内の優秀な高校生が県立大を目指し

た。しかし現在では、「行きたい大学」から「行ける大学」になってしまっている」（大学関係者）と、危機感は強い。また5教科全ての学力が問われることはないため、「第1志望としては積極的に選ばれず、ほかの国公立大志願者の滑り止めになっている」といった指摘も根強い。

「ここまで築かれた『負のイメージ』から脱却するのは簡単ではない」。県立大事務局長の百岳晴は頭を抱える。しかし、県内唯一の公立大としてのブランド、そして意地もある。百岳はこう力を込める。「だからこそ今から何をやるかが大事だ。さまざまなチャレンジを続けながら、発信したい」。復権を懸けた模索が続く。

＝文中敬称略＝
（後藤洋平）